

- For more records, click the Records link at page end.
- To change the format of selected records, select format and click Display Selected.
- To print/save clean copies of selected records from browser click Print/Save Selected.
- To have records sent as hardcopy or via email, click Send Results.

<input checked="" type="checkbox"/> Select All				Format
<input checked="" type="checkbox"/> Clear Selections	Print/Save Selected	Send Results	Display Selected	Free

1. ☐ 7/5/1 DIALOG(R)File 352:Derwent WPI (c) 2006 Thomson Derwent. All rts. reserv.

004413020

WPI Acc No: 1985-239898/198539

XRAM Acc No: C85-103979

Cholesterol increment-inhibitor - contains catechin deriv.

Patent Assignee: MITSUI NORIN KK (MITS-N)

Number of Countries: 001 Number of Patents: 002

Patent Family:

Patent No	Kind	Date	Applicat No	Kind	Date	Week
JP 60156614	A	19850816	JP 8410980	A	19840126	198539 B
JP 90044449	B	19901004	JP 8410980	A	19840126	199044

Priority Applications (No Type Date): JP 8410980 A 19840126

Patent Details:

Patent No	Kind	Lan	Pg	Main IPC	Filing Notes
JP 60156614	A		6		

JP 60156614 A

Abstract (Basic): JP 60156614 A

The inhibitor contains a tea-catechin deriv. of formula (I) where  
R1 is H or OH; R2 is H or (II).

USE - (I) are known, are typically included (-) epicatechin, (-)  
epigallocatechin, (-) epicatechin gallate, and (-) epigallocatechin  
gallate.

O/O

Title Terms: CHOLESTEROL; INCREMENT; INHIBIT; CONTAIN; CATECHIN; DERIVATIVE

Derwent Class: B02

International Patent Class (Additional): A61K-031/35; A61K-035/78;

C07D-311/62

File Segment: CPI

Derwent WPI (Dialog® File 352): (c) 2006 Thomson Derwent. All rights reserved.

<input checked="" type="checkbox"/> Select All				Format
<input checked="" type="checkbox"/> Clear Selections	Print/Save Selected	Send Results	Display Selected	Free

© 2006 Dialog, a Thomson business

⑬ Int. Cl.<sup>4</sup>  
A 61 K 31/35  
// C 07 D 311/62

識別記号  
ADN

庁内整理番号  
7330-4C  
6640-4C

⑭ 公開 昭和60年(1985)8月16日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全6頁)

⑮ 発明の名称 コレステロール上昇抑制剤

⑯ 特 願 昭59-10980

⑰ 出 願 昭59(1984)1月26日

⑱ 発 明 者 原 征 彦 静岡市駒形通5-11-8

⑲ 発 明 者 大 矢 真 弓 静岡市遠藤新田392-10

⑳ 出 願 人 三井農林株式会社 東京都中央区日本橋室町2丁目1番地1

㉑ 代 理 人 弁理士 久保田 藤郎

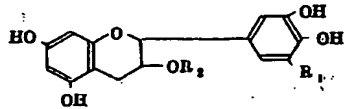
明 細 書

1. 発明の名称

コレステロール上昇抑制剤

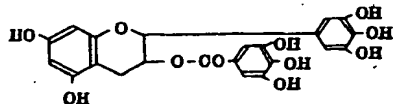
2. 特許請求の範囲

1. 一般式



(式中、R<sub>1</sub>はHあるいはOHを、R<sub>2</sub>はHあるいは-OO-C<sub>6</sub>H<sub>2</sub>(OH)<sub>3</sub>を示す。)で表わされる茶カテキン類を有効成分とするコレステロール上昇抑制剤。

2. 茶カテキン類が式



で表わされる(-)エピガロカテキンガレートである特許請求の範囲第1項記載のコレステロール上昇抑制剤。

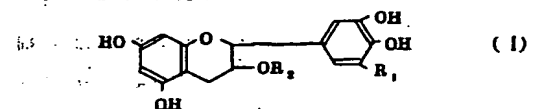
3. 発明の詳細を説明

本発明はコレステロール上昇抑制剤に関する。血中および肝臓中における脂質、特に血中コレステロールの増加による血管老化に伴なって惹起される各種心臓疾患、脳疾患等は近年重大関心事となっており、これらの発症を予防する薬剤の出現が求められている。

本発明者らは茶カテキン類を製造する方法に関し、既に茶葉中より効率よく茶カテキン類を採取することに成功し、併せてその生理活性についても研究を進め、いくつかの知見を得た。たとえばラードに対する抗酸化性、天然着色料に対する退色防止効果、天然精油の劣化防止効果、魚類変敗臭の抑臭効果、細菌類に対する抑菌効果等である。

その後、さらに研究を続けた結果、茶カテキン類がすぐれたコレステロール上昇抑制作用を有することを見出し、本発明を完成するに至った。

すなわち本発明は一般式





4週間を通じて各群とも飼料摂取、成長共に正常であつた。プラズマ中成分の測定結果を第2表に、肝臓中成分の測定結果を第3表に示す。

第2表

	第1群	第2群	第3群
ヘマトクリット(%)	44.0±1.0	46.0±0.8	45.4±0.5
グルコース(㎎/dl)	155.8±9.9	174.0±10.6	145.2±4.1
総コレステロール(㎎/dl)	141.7±6.5 <sup>a)</sup>	111.7±3.5 <sup>b)</sup>	109.9±6.0 <sup>b)</sup>
Free-コレステロール(㎎/dl)	20.15±2.51 <sup>a)</sup>	20.82±1.38 <sup>a)</sup>	21.48±1.78 <sup>a)</sup>
総コレステロール/Free-コレステロール(㎎/dl)	115.5±7.8 <sup>a)</sup>	90.87±4.06 <sup>b)</sup>	88.42±4.84 <sup>b)</sup>
HDL-コレステロール(㎎/dl)	46.83±7.72 <sup>a)</sup>	47.06±1.24 <sup>a)</sup>	49.02±4.58 <sup>a)</sup>
LDL-コレステロール(㎎/dl)	78.50±4.85 <sup>a)</sup>	54.76±3.21 <sup>b)</sup>	50.89±3.19 <sup>b)</sup>

a), b) は  $p=0.05$  における有意差表示

肝臓中の総脂質の割合は、解剖時重量に換算して対象群が22.5%と非常に高いのに対し、粗カテキン添加によつて14.9%, 10.4%と顕著に低くなっている。トリグリセライド、コレステロール量においても粗カテキン添加によつて対象群に比べて著しく低下した。

#### 実験例2

1群6匹のWistar系雄雌乳ラット(3週令体重約40g)4群を用い、実験例1と同様な条件下で4週間飼育し、実験に供した。

実験群は2.5%カゼインを含む基本飼料を与える基本食群を第1群とし、強制的に血中コレステロールを増加させる為にシユーグロースおよびラードを各々1.5%, コレステロール1.0%、さらにNaコレート0.2%添加した対象群を第2群とする。対象群に対し、EGUGを0.5%および1.0%添加した群を第3群、第4群とする。飼料組成は第4表に示す。

第3表

	第1群	第2群	第3群
総脂質(%)	22.50±1.16 <sup>a)</sup>	14.94±0.62 <sup>b)</sup>	10.38±0.21 <sup>c)</sup>
総トリグリセライド(㎎)	764±54 <sup>a)</sup>	562±33 <sup>b)</sup>	266±20 <sup>c)</sup>
トリグリセライド(㎎/g肝臓)	77.6±4.6 <sup>a)</sup>	59.8±3.8 <sup>b)</sup>	33.3±1.3 <sup>c)</sup>
総コレステロール(㎎)	283±19 <sup>a)</sup>	213±17 <sup>b)</sup>	149±21 <sup>c)</sup>
コレステロール(㎎/g肝臓)	28.6±1.1 <sup>a)</sup>	22.6±1.7 <sup>b)</sup>	18.4±1.9 <sup>b)</sup>

a), b), c) は  $p=0.05$  における有意差表示

プラズマにおいて、ヘマトクリット、グルコース値は3群とも正常値を示した。総コレステロール量は、対象群に対して粗カテキンを1.0%, 2.0%添加することによつてコレステロール上昇が抑制されていることがわかる。また、コレステロールの存在形態においては、Free-およびHDL-コレステロール量に差はなく、体内へのコレステロール蓄積に最も関与していると思われるLDL-コレステロール量が対象群では多いが、粗カテキン添加によつて著しく抑制されている。

第4表 飼料組成

成分	組成 (%)			
	第1群	第2群	第3群	第4群
カゼイン	25.0	25.0	25.0	25.0
α-デカン	63.9	35.7	35.2	34.7
シユーグロース	—	15.0	15.0	15.0
ラード	—	15.0	15.0	15.0
コーン油	5.0	2.0	2.0	2.0
塩混合	5.0	5.0	5.0	5.0
ビタミン混合	1.0	1.0	1.0	1.0
塩化コリン	0.1	0.1	0.1	0.1
コレステロール	—	1.0	1.0	1.0
Naコレート	—	0.2	0.2	0.2
粗カテキン	—	—	—	—
EGUG	—	—	0.5	1.0

4週間を通じて各群とも飼料摂取、成長共に正常であつた。プラズマ中成分の測定結果を第5表に、肝臓中成分の測定結果を第6表に示す。

第 5 表

	第 1 群	第 2 群	第 3 群	第 4 群
ヘマトクリット (%)	465±16	446±10	439±08	427±06
ヘモグロビン (g/dl)	1465±019	1323±010	1347±014	1324±018
グルコース (mg/dl)	1766±36 <sup>a)</sup>	1785±73 <sup>a)</sup>	1827±73 <sup>a)</sup>	1856±53 <sup>a)</sup>
総コレステロール (mg/dl)	9338±489 <sup>a)</sup>	2237±143 <sup>b)</sup>	1428±48 <sup>c)</sup>	1143±86 <sup>a)</sup>
Free-コレステロール (mg/dl)	2689±129	3967±172	2823±147	2257±129
総コレステロール- Free-コレステロール (mg/dl)	6658±373	1840±132	1146±42	9175±750
HDL-コレステロール (mg/dl)	5346±294 <sup>a)</sup>	2156±145 <sup>b)</sup>	3106±145 <sup>c)</sup>	2970±107 <sup>c)</sup>
LDL-コレステロール (mg/dl)	1130±081 <sup>a)</sup>	1638±105 <sup>b)</sup>	8527±460 <sup>c)</sup>	5394±483 <sup>d)</sup>
トリグリセライド (mg/dl)	1627±71 <sup>a)</sup>	9208±801 <sup>b)</sup>	7412±605 <sup>b)</sup>	7189±887 <sup>b)</sup>

a), b), c), d) は  $p=0.05$  における有意差表示

第 6 表

	第 1 群	第 2 群	第 3 群	第 4 群
総脂質 (%)	520±013 <sup>a)</sup>	3295±069 <sup>b)</sup>	2873±081 <sup>c)</sup>	2399±057 <sup>d)</sup>
総トリグリセライド (mg)	880±64 <sup>a)</sup>	1929±49 <sup>b)</sup>	164±88 <sup>c)</sup>	1046±77 <sup>d)</sup>
トリグリセライド (mg/肝臓)	117±06 <sup>a)</sup>	161±8 <sup>b)</sup>	128±3 <sup>c)</sup>	984±66 <sup>d)</sup>
総コレステロール (mg)	362±15 <sup>a)</sup>	1318±81 <sup>b)</sup>	1072±30 <sup>c)</sup>	815
コレステロール (mg/肝臓)	483±011 <sup>a)</sup>	106±3 <sup>b)</sup>	843±22 <sup>c)</sup>	714

a), b), c), d) は  $p=0.05$  における有意差表示

プラズマにおいて、ヘマトクリット、ヘモグロビンおよびグルコースは各群とも正常値を示した。総コレステロール量は、基本食群が 93 mg/dl であったのに対し、対象群は 224 mg/dl と増大しているが、0.5%、1.0% BGOg 添加によつて 143 mg/dl、114 mg/dl とコレステロールの増加を抑制した。特に 1.0% BGOg を添加した第 4 群は基本食群と有為な差はなく、強制的にコレステロール値を上昇させる食餌の影響を完全に抑制した。コレステロールの存在形態も、基本食群に対し対象群は HDL-コレステロールが少なく、LDL-コレステロールが多いが、これに対し第 3 群、第 4 群では HDL-コレステロールが多くなり LDL-コレステロールが少なくなった。

肝臓中の総脂質の割合は、解剖時重量に換算して基本群 5.2% に対し対象群は 33.0% と極めて増大したが、0.5%、1.0% BGOg 添加によつて 28.7%、24.0% と著しく減少した。トリグリセライド、コレステロール量においても、BGOg 添加によつて対象群に比べて増加を抑制した。

尚、実験例 1, 2 を通じて第 4 週目の血清脂質量を Folch 法により測定したところ、いずれも対象群に比べ粗カテキンあるいは BGOg 添加群の方が大きな値を示した。

#### 実験例 3

1 群 6 匹の Wistar 系雄乳ラット (3 週令体重約 40 g) 2 群を用い、実験例 1 と同様な条件下で 4 週間飼育し、実験に供した。

実験例 1, 2 を通じて血中および肝臓中の脂質、特にコレステロールを強制的に増加させる飼料を与えても、粗カテキン、BGOg の添加によつてその増加を抑制することがわかった。しかし、コレステロールは細胞膜構成成分、各種ホルモン前駆物質として重要であり、正常値に保つ必要がある。そこで、今回の実験では BGOg はコレステロール強制添加食に添加した時にはコレステロール値を下げるが、基本食に添加した時には影響しないことを確かめる。

従つて、実験群は 25% カゼインを含む基本飼料を与える基本食群を第 1 群とし、これに対して

1.0 % EGCg添加した群を第2群とする。飼料組成は第7表に示す。

成 分	第 7 表	
	組 成 (%)	
	第 1 群	第 2 群
カゼイン	25.0	25.0
$\alpha$ -デンプン	63.9	62.9
コーン油	5.0	5.0
塩混合	5.0	5.0
ビタミン混合	1.0	1.0
塩化コリン	0.1	0.1
EGCg	—	1.0

2週間を通じて2群とも飼料摂取、成長共に正常であつた。プラズマ中成分の測定結果を第8表に、肝臓中成分の測定結果を第9表に示す。



第 8 表

	第 1 群	第 2 群
ヘマトクリット(%)	45.2 $\pm$ 0.7 <sup>a)</sup>	44.4 $\pm$ 0.5 <sup>a)</sup>
ヘモグロビン(g/dl)	140.7 $\pm$ 0.12 <sup>a)</sup>	138.3 $\pm$ 0.28 <sup>a)</sup>
グルコース(mg/dl)	166 $\pm$ 5 <sup>a)</sup>	170 $\pm$ 1 <sup>a)</sup>
総コレステロール(mg/dl)	95.1 $\pm$ 4.1 <sup>a)</sup>	103.5 $\pm$ 5.3 <sup>a)</sup>
Free-コレステロール(mg/dl)	30.2 $\pm$ 1.7 <sup>a)</sup>	31.5 $\pm$ 1.4 <sup>a)</sup>
総コレステロール-Free-コレステロール(mg/dl)	64.9 $\pm$ 2.5 <sup>a)</sup>	72.0 $\pm$ 4.2 <sup>a)</sup>
HDL-コレステロール(mg/dl)	55.6 $\pm$ 2.9 <sup>a)</sup>	51.7 $\pm$ 2.1 <sup>a)</sup>
LDL-コレステロール(mg/dl)	14.2 $\pm$ 1.8 <sup>a)</sup>	17.2 $\pm$ 1.4 <sup>a)</sup>
トリグリセライド(mg/dl)	164 $\pm$ 22 <sup>a)</sup>	165 $\pm$ 23 <sup>a)</sup>

a) は  $p=0.05$  における有意差表示

第 9 表

	第 1 群	第 2 群
総脂質(%)	5.35 $\pm$ 0.19 <sup>a)</sup>	4.58 $\pm$ 0.05 <sup>a)</sup>
総トリグリセライド(mg)	91.6 $\pm$ 8.7 <sup>a)</sup>	73.7 $\pm$ 4.0 <sup>a)</sup>
トリグリセライド(mg/肝臓)	11.7 $\pm$ 1.0 <sup>a)</sup>	8.9 $\pm$ 0.6 <sup>a)</sup>
総コレステロール(mg)	35.4 $\pm$ 1.4 <sup>a)</sup>	35.3 $\pm$ 1.2 <sup>a)</sup>
コレステロール(mg/肝臓)	4.55 $\pm$ 0.15 <sup>a)</sup>	4.36 $\pm$ 0.07 <sup>a)</sup>

a) は  $p=0.05$  における有意差表示

プラズマにおいて、ヘマトクリット、ヘモグロビンおよびグルコースは2群とも正常値を示した。総コレステロール量も基本食群が95 mg/dl、第2群が103 mg/dlと有意な差は見られず、その他の成分でも差は見られなかつた。

肝臓中の総脂質の割合は、解剖時重量に換算して基本食群(第1群)5.4%に対し、第2群も4.6%と有意な差はなく、コレステロール、トリグリセライドにおいても差はなかつた。

以上の実験例1, 2および3によつて、茶カテキン類(特にEGCg)はラットに脂質、特にコレステロールを強制的に増加させる飼料を与えた時、血中および肝臓中の脂質、特にコレステロールの増加を顕著に抑制することがわかつた。さらに、基本食を与えた時には、血中および肝臓中の体成分として重要なコレステロールに影響を与えないことも明らかとなつた。

急性毒性試験の結果を以下に示す。

ICR系マウス雄6週令にEGCgを経口投与した場合、1週間後のLD<sub>50</sub>は2314 mg/kgであつた。さら

に、ICR系マウス雌5週令にEGCgを腹腔投与した場合、1週間後のLD<sub>50</sub>は150 mg/kgであつた。

本発明のコレステロール上昇抑制剤を人体に投与する場合は、通常1日量2~5g程度を経口的に服用することが好ましく、そのままあるいは適宜希釈剤を加えて増量し散剤として服用してもよい。さらに、錠剤またはカプセル剤としてもよい。即ち乳糖、ぶどう糖等の賦形剤；でんぷん糊液、CMO液等の結合剤；でんぷん、結晶セルロース等の崩壊剤；ステアリン酸マグネシウム、タルク等の滑沢剤等を用いて錠剤またはカプセル剤を製造することができる。また、錠剤には必要に応じて糖衣を施してもよい。

以下に製剤を実施例として示すが、製剤はこれのみに限定されるものではない。

#### 実施例 錠剤

粗カテキンまたはEGCg	100mg
軽質無水ケイ酸	80mg
結晶セルロース	140mg
乳糖	適量

ステアリン酸マグネシウム

2号

上記組成量を常法に従い1錠に成型する

特許出願人 三井炭林株式会社

代理人 井堀士久保田 藤郎

